

水の哲学

アリストテレス 「水こそは水気のあるものにとって その自然の原理である」

アリストテレス(紀元前384～紀元前322)は古代ギリシャの哲学・科学・文化の完成者として「万学の祖」と呼ばれた。師プラトンのアカデメイア学園で20年間にわたって勉学に励み、プラトンの死後はマケドニア王フィリッポスに招かれてアレキサンダー王子の家庭教師となった。そのとき伝授した徳のある為政者による政治が理想の政治であるという政治学がのちのアレキサンダー大王による東方遠征のきっかけをつくったといわれている。

水始源説と4元素説を再構築

「水こそは水気のあるものにとってその自然の原理である」はアリストテレス全集の『形而上学』で言及されている。

この言葉は世界最初の哲学者といわれるタレスによる「万物のアルケー(始源)は水である」という水=アルケー説を基本的に踏襲したものだ。アリストテレスは文学、論理学、自然科学、政治学、倫理学などを網羅した膨大な著作の中でしばしばタレスに言及している。

「大地が水の上に横たわっていると主張する人たちもいる。すなわちこの説はわれわれに伝わるもっとも古いものであってミトレス人のタレスのだと言われる」(『天体論』)

「ある人々は全体のうちに靈魂が混合されていると主張する。ここからおして、おそらくまたタレスも万物は神々に満ちていると考えるに至ったのだろう」(『靈魂論』)

タレスの水=アルケー説はエンペドクレスのいわゆる4元素説として再構築された。4元素説によると万物のリゾーマタ=根源は火・水・土・空気の4つの基本要素で構成されている。アリストテレスもこの4元素説を基盤として遙か天空まで視野に入れた壮大な世界観を創造した。

すべては水気のあるもので存在する

アリストテレスは4元素を成り立たせている根源的なものとして温・冷・乾・湿の4つの性状



をピックアップした。これらの性状の組み合わせによって4元素は形づくられているという。すなわち<温>と<乾>で火、<冷>と<湿>で水、<冷>と<乾>で土、<温>と<湿>で空気になると主張した。

そしてアリストテレスは4元素の中でも、ひときわ水を重視していることが著作の端々からうかがえる。『形而上学』でタレスによる水=アルケー説を紹介したうえで次のように述べている。

「彼がこの見解を抱くに至ったのは、おそらくすべてのものの養分が水気のあるものであり、熱そのものさえもこれから生じ、またこれによって生存しているのを見てであろう」

「さらにまた、すべてのものの種子は水気のある自然性(フィシス)をもち、そして水こそは水気のあるものにとってその自然の原理であるという理由からであろう」



これをわかりやすくいうと、栄養となるすべてのものは水気を含んでおり、あらゆるものの種子は水気を帯びており、熱さえも水気のあるものから生じているということになる。

海と生きるものへの愛

水に執着したアリストテレスはレスボス島に滞在し、自然科学的な知識を総動員して海洋生物を精密に観察した。彼の労作である『動物誌』や『動物発生論』は現在の生物学のルーツといわれている。

この時期にアリストテレスはウニがランタン(ちょうちん)型の強力な5枚歯の咀嚼器をそなえていることを発見した。それでこの器官は現在でも「アリストテレスの提灯」と呼ばれている。

またタコ類の排卵などに関する記述も実際に潜水してみなければわからないほど詳細でスキューバ・ダイビングのようなことをやっていたと推測できる。アリストテレスはたんなる学者というより近代科学のセンスをそなえた行動的な人物だったようだ。

アリストテレスは生物が魂をもつ点で無生物と異なり、植物や動物にも靈魂があると考えていた。彼の海洋生物の貪欲な観察には学問的興味を超えて海で生きるものに対する強烈な愛着が感じられる。

それはまた万物の根源である水の象徴としての海に対する愛だったのかもしれない。(高倉)